

温泉発見伝説と動物

— 長野県上田市鹿教湯温泉の場合 —

菱 川 晶 子

1. 先行研究と本稿の目的

世界でも有数の温泉国である我が国では、多くの温泉地に温泉発見の経緯や由来を語った伝説が伝えられている。この温泉発見伝説は民俗学でも早くから注目を集め、高木敏雄が『日本伝説集』の「縁起伝説」に取り上げているのが嚆矢になる⁽¹⁾。また柳田國男も、『山鳥民譚集』の中で動物名の付いた温泉とその由来について記し、白鷺や鹿等は古来靈物であり、神主や僧侶が発見者の場合には、土地の神仏の使者伝令とされるのは当然のことと述べている⁽²⁾。その後『日本神話伝説集⁽³⁾』や『日本伝説名彙⁽⁴⁾』にも、温泉に関わる伝説を挙げている。

宗教学者の加藤玄智等による「温泉の信仰と伝説」（『温泉大鑑』）では、発見伝説が細かく七分類され、「鳥獣に教えられて発見した温泉」は、「獵師、樵夫、亡命者等に発見された温泉」に次いで二番目に挙げられている⁽⁵⁾。また山口貞夫は「温泉発見の伝説」において、伝説を神託あるいは靈夢によるもの、著名な高僧武人の手引きによるもの、傷ついた動物の浴泉によるもの、武将の傷兵を送った場合の四つに分類している⁽⁶⁾。

その後、各地の伝説を編んだ『日本伝説大系』が示した話型では、温泉発見伝説は「温泉発見Ⅰ（動物の導き）」と「温泉発見Ⅱ（薬師如来のお告げ）」に二分類される⁽⁷⁾等、分

類については多くの研究者によって試みられてきた⁽⁸⁾。このように、温泉発見伝説の分類を巡る考察が盛んであり、その分類には若干の変遷がみられるわけだが、動物の関わる伝説が温泉発見伝説の中でも重要な位置を占めている点に間違いはないだろう。

動物との関わりではまた、温泉医学者が動物種を指摘する等、他分野からの考察も進められてきた⁽⁹⁾。中でも注目されるのは、温泉の泉質から考察する近年の研究である。一つは怪我や傷に効能のある温泉には、動物が発見したものが多いという分析であり⁽¹⁰⁾、動物の発見につながる温泉は塩類泉が最も多く、動物の生活や慣習が温泉の泉質に関係しているという指摘である⁽¹¹⁾。後者は温泉発見伝説が単なる物語ではなく、そのもとには動物と温泉とを結びつける実態があった可能性を感じさせるものである。

このように多分野に亘って関心を集める温泉発見伝説だが、温泉地を個別に取り上げて、動物と温泉の発見伝説について詳細に論じたものは意外にも少ない。例えば菊池温泉と白龍の関わりについての論考が挙げられるくらいだ。そこでは、新しく掘り起こされた温泉と祭に、白龍伝説が活用されていく過程が明らかにされている⁽¹²⁾。

動物と温泉発見伝説の関わりについて深く探するためには、まずは温泉地毎の個別の分析が肝要と思われる。このため、本稿では実地

調査を行った長野県上田市にある鹿教湯温泉を取り上げ、そこに展開する動物と温泉発見伝説の関係について考察を試みたいと思う。

2. 鹿教湯温泉の地勢及び概況

鹿教湯温泉は、現在長野県上田市丸子町北西部に位置し（図1）、昭和31年に国民保養温泉地として厚生省に指定された温泉地である。また、昭和56年には国民保健温泉地にも選定されている⁽¹³⁾。

鹿教湯は、明治9年（1876）に平井村と合併して小県郡高梨村から西内村となり、昭和29年（1954）には丸子町に編入し、平成18年（2006）になると新設された上田市の一部に入っている。江戸時代には天領だった温泉である。

鹿教湯温泉は、上田から保福寺峠を越えて松本へ繋がる北国脇往還近くにあり、この北国脇往還には物資の輸送や人々の往来がみら

れた。保福寺峠を通る道は、丸子と青木の境界線の尾根を奈良本や浦野に向かっていることから、東山道の古道ではないかともいわれている。また、この峠より南に位置する三才山峠は、松本の城主であった小笠原氏が江戸へ参勤交代に行く時に越えた峠でもある。松本領で産出された御用材である榑木を運んだことから、三才山峠を通るこの道は榑木街道とも呼ばれていた⁽¹⁴⁾。

温泉の湧く内村川が流れる近辺の地質は主に緑色凝灰岩からなっており⁽¹⁵⁾、この岩石の間から温泉の湧出がみられる。内村川沿いに点在する温泉には、鹿教湯の他に霊泉寺温泉と大塩温泉の2つがあり、これらは総称して内村温泉郷と呼ばれていたが、現在は丸子温泉郷と称され親しまれている。鹿教湯の湯は、単純温泉（弱アルカリ性低張性高温泉）であり、神経痛等に効果があるとされているが、昭和30年に旅館組合がボーリングで高温の湯を掘り当て、後に源泉が統合するまでは、湯は「鹿

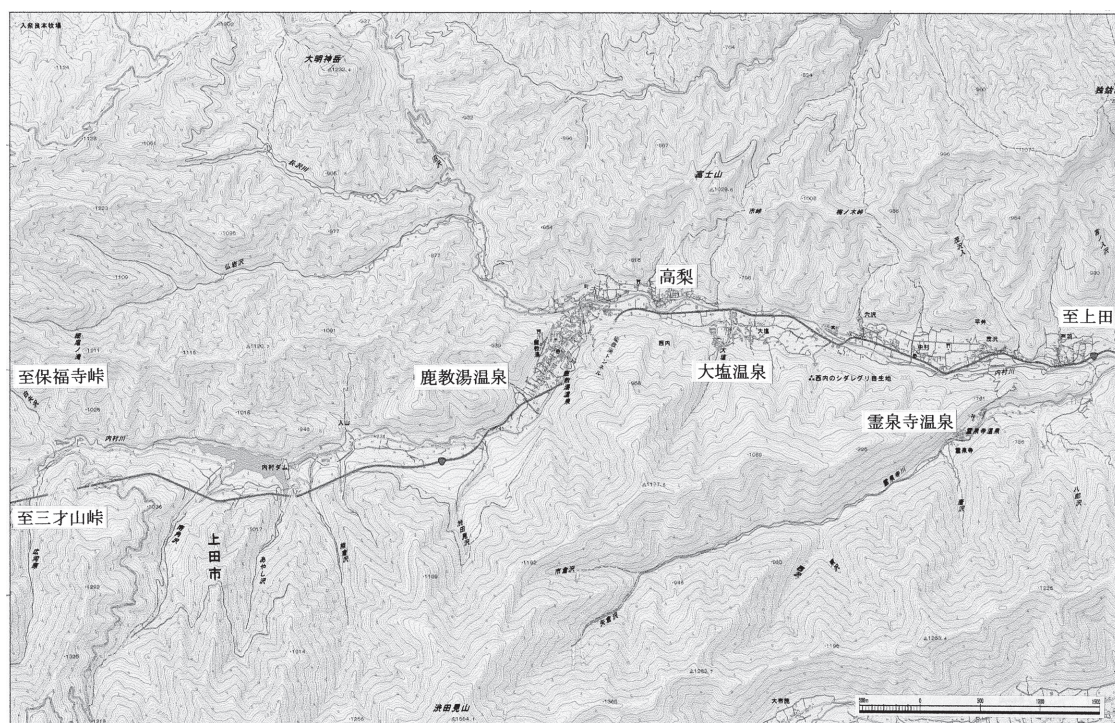


図1 鹿教湯温泉周辺図（本図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図を使用したものである。）

教湯」と「河原湯」とに分かれていた。「上湯^{うえのゆ}」と呼ばれた「鹿教湯」は中性弱アルカリ性の泉質であるため、中風や疥癬、打身、通風に良いとされていたのに対して、「下湯^{したんゆ}」とも呼ばれた「河原湯」は硫化水素が含まれることから、疝気等に効くとうたわれていた。また、ボーリングによって枯れてしまった「新湯」は塩類泉に属した湯であり、よく蛇が入っていたことから「蛇湯」とも称されていた⁽¹⁶⁾。

温泉の開湯は1200年頃と伝わり、平成8年には開湯800年を祝う祭が行われている。この年は、国民保養温泉地に指定されてから40年になる節目の年でもあったため、約一年をかけて様々な行事が丸子町全体で行われている⁽¹⁷⁾。

このような古い歴史を持つ鹿教湯温泉だが、昔の温泉地はどのようなものであったのだろうか。記録で遡れる明治時代の温泉場の様子を次にみよう。

鹿教温泉場は字高梨に在りて上田を距る西南五里許 人力車を走らすれば僅かに三時間にして到着すべし 西内は戸数百八十

余戸三面山を環らせども東の一方に開て道路稍や平坦なり 村は宛も丁字形をなし家屋甚だ美なり 皆旅舎を業とす 茲に出せる図は近傍稲荷山より全村を望みたる風景にして 図中の橋は五臺橋と名づけ鹿教湯川に架して文殊堂への通橋なり 夏の夕此の橋上にて納涼をなすもの最も多し(文字間の空白は筆者による。以下同様)

(西澤俊司編・刊『信濃温泉誌⁽¹⁸⁾』1892)

上田から鹿教湯温泉までは、人力車で三時間程かかっていたようだ。三面を山に囲まれた鹿教湯は、東の一方に少し平らな土地があり、そこに温泉場が開けていたのがわかる。当時西内村には180余戸があり、温泉場の家屋は大層美しく、皆旅舎を業としていたとある。同書に載る絵図(図2)も併せてみよう。稲荷山からみる温泉場は、諏訪社前からまっすぐに伸びた道の両側に旅舎が並んだ光景である。手前に流れる鹿教湯川に架けられた五台橋からは、右手に姿を見せる文殊堂へと道が続いている。そしてその橋の近くに描かれている建物が、共同浴場になる。明治25年頃



図2 鹿教湯図(『信濃温泉誌』1892)

の様子である。

また本書によると、旅舎はかどや（永井伝左衛門）、内邑亭（斎藤弥惣太）、つるや（斎藤千重）、ふじや（斎藤松太郎）、かめや（斎藤種一郎）、まつや（斎藤治一）、竹林亭（高梨忠左衛門）、和泉屋（斎藤源三）、林屋（赤沼林太）の9軒があったようである⁽¹⁹⁾。これらの旅舎は、皆外湯の浴場近くに建てられていた。

同年に出された『信濃鉾泉誌』には、鹿教湯は中風や切り傷等に効果があるため遠方よりの来浴者が多く、1年の平均が1万人を下らないとある。中風の治療のための湯治場として、鹿教湯はよく知られていたようである⁽²⁰⁾。

本泉ハ丘腹ヨリ湧出シ樋ヲ以テ導キ一之浴槽ヲ造レリ 之二隣シテ客舎十三戸両側ニ高閣ヲ構フ 各戸皆多数之客ヲ有シ頗ル廣壮ナリ 一般之飲食物ハ不便ヲ告ルコトナク物價極メテ低廉ナリ

（下條臺次郎編『信濃鉾泉誌⁽²¹⁾』1892）

これをみると、丘腹から湧出する湯を樋で注いだのが一之浴槽の鹿教湯であり、その隣には道の両側に高樓を構えた客舎13戸が並んでいたようである。詳細は不明だが、『信濃温泉誌』よりも客舎数が多くなっている。また、鹿教湯の「河原之湯」については次のように書かれている。

本泉ハ同シク西内村ニアリ 右鹿教湯ト其浴室ヲ接ス 泉源ハ甚奇異ニシテ鹿教湯川ノ河底ナル岩石ノ岩間ヨリ湧出ス 之ヲ樋口ヨリ浴槽ニ導ケリ 故ニ河原之湯ト称ス 本泉ハ疝氣疝癰ニ偉効ヲ奏スルヲ以テ来浴者甚ダ多シ 近來其地ニ於テ浴室ノ改良ヲ企ツルモノアリ 落成之後ハ完美之浴場トナルニ至ラン

本浴室ヨリ山腹ニ沿フテ鹿教湯川ニ架シタル一橋アリ 薬師寺ニ至ル此間山光水色甚ダ美ナリ 殊ニ清流橋下ヲ走り其景色甚佳ナリ

（下條臺次郎編『信濃鉾泉誌⁽²²⁾』1892）

鹿教湯のすぐそばにある浴室は、湯が鹿教湯川の川底の岩間から湧出するために河原之湯と称されているとある。鹿教湯川は現在の内村川になる。湯の効能は先の湯とは異なり、疝氣等に効くためまた浴者が多いようだ。橋の先には薬師寺があり、そこへの道程は清流もあつて美しい景色だと記されている。

またこれに近い「新湯」については、次のようにある。

鹿教河原ノ二湯ヲ去ルコト貳丁 鹿教湯川ノ岸ニ沿フタル丘腹ヨリ湧出ス 本泉ハ目下浴室新築之計画中ナルモ大桶ヲ以テ浴槽ニ代ヘ樋口ヨリニ之ヲ導ケリ 本泉ハ眼病腫物梅毒等ニ効驗著ルシキヲ以テ来浴スルモノ多シ 本浴室落成之後ハ定メテ多数ノ入浴者ヲ見ニ至ラン

本浴場ノ南方字裏ノ山ニ全地浴舎之共全ニテ新築セル一觀月堂アリ 山上四顧之眺望甚佳ニシテ浴客之散歩ヲ試ムベキ地ナリ

（下條臺次郎編『信濃鉾泉誌⁽²³⁾』1892）

二つの湯から二丁のところにあるのが新湯になる。川岸の丘腹から湧出する湯を大桶に導いて入浴していたようだ。眼病や腫物等に効く湯であり、計画中の浴室が完成したなら多くの入浴者が来るだろうとある。少し離れた南方には観月堂があり、周囲の眺望も良く、浴客の散歩に適した地とも記されている。同年の次の文献も併せてみよう。

鹿教湯ハ河北ノ辺リ丘腹ニ湧出シ稍々平地ノ浴地ニ引ク 河原湯ハ溪流中ヨリ発シ篲ヲ以テ浴槽ニ注グ 彼温度暖ニ此温度熱シ 而シテ新湯ハ目下浴槽ノ設ケアルニアラザレドモ 追テ浴場ヲ開クト云フ 浴場ノ北方小峻坂ヲ以テ旅舎ニ連接ス（因ニ記ス鹿教湯ノ中風、通風、痔疾、脚氣、痛傷ニ効アルコトハ信濃地誌ニ見エシ処ナレ共 就中中風治療ニ著名ナルハ 蓋シ身体

不随ノ病者ヲシテ塩水ニ入浴セシメ 而シテ入浴ノ前後彼小坂ヲ上下スルガ為メニ自然筋肉ニ運動ヲ促シ 以テ泉効ヲ補ケタルニ原因スルモノナラン乎) 土地高く空氣乾燥ニシテ旅館亦清潔物価ハ概シテ廉ニシテ 川魚鳥獸肉鶏卵其他山産物多シ 有名ナル文殊堂ハ僅カニ浴場ヲ距ル南方ノ山麓ニアリ 其境内ハ喬樹鬱蒼トシテ昼尚ホ暗ク 清溪其北ヲ流レテ湍水崑石ニ激シ白沫ヲ飛バス 而シテ深淵清澄鑑ムベシ 又鉞抗アリ奇鉞珍石ヲ出ス 西方拾数町ヲ隔ツル広漠タル原野ニ社アリ 笠岩ノ神ヲ祭ル其傍ニ数拾丈ノ岩石アリ 其陰莖に似タルヲ以テ俗ニ之ヲ男岩ト称ス 復タ奇観ナリ コレ等ハ皆客ノ遊歩地ニ充ツベシ 此地浅間温泉ニ至ル五里別所沓掛ノ二湯ヘ至ル各二里而シテ霊泉温泉ヘハ一里ナリ

(齋藤利一編『信濃鉞泉誌⁽²⁴⁾』1892)

鹿教湯は「暖」い程度の温度であるのに対して、河原湯は「熱」い湯であったのがわかる。ぬるい湯は中風や通風等の病いに効果を発揮したようだ。前述されていたように、旅

館は清潔で物価も安く、湯治者には過ごしやすい温泉場だったのだろう。

旅館では「川魚鳥獸肉鶏卵其他山産物」が供され、少し足を伸ばせば文殊堂や男岩等のある奇観な原野を巡る遊歩地もあり、湯治の合間の散策もできたようだ。「霊泉温泉」は霊泉寺温泉を指しているのだろう。他の温泉地も近い距離にあった。

また、この頃の鹿教湯は霊泉寺温泉と共に三才山峠越えの交通の要所近くにあり、養蚕や製糸関係者の往来も多くみられたようである。そしてこの活況は明治35年に篠ノ井線が開通するまで続いたのである⁽²⁵⁾。

明治29年には、「長野縣信濃國小縣郡鹿教温泉場全圖」が作成されている(図3・4)。東京浅草精行舎によるものである。図3をみてみよう。右手上方に観月堂、少し下がって諏訪社がみえる。樹々が繁った境内には、参拝者の姿もある。社前から伸びた湯端道りには、数台の人力車も描かれている。道の両側には、諏訪社側から角屋、赤沼、斎藤、林屋、つる屋、いづみ屋、ふぢ屋、たかなし、かめ屋、まつ屋の十の旅館が並んでいる。茅葺き



図3 「長野縣信濃國小縣郡鹿教温泉場全圖」1896

が多く、かめ屋は三層の高楼になっている。左手に斜めのようにみえる建物は、後に貼られたようであり、斎藤旅館と聞いている。かめ屋の前から坂を下っていくと、鹿教湯の浴場が見えてくる。またその隣には、温泉祖神の祀られている社もみえる。この温泉祖神は、湯に関わるといわれている大黒神と伝わっている⁽²⁶⁾。さらに坂を下ると、川の横に河原湯の浴場がある。少し離れた右手前には、新湯の浴場もみえる。三つの浴場の屋根には、風よけの大きな石が置かれている。

温泉祖神の近くには、川向こうへ渡るための橋が架かっている。屋根のある少し丸みを帯びたこの橋は、五台橋である。対岸には、長い階段を昇った先に薬師堂と、広い境内を持つ文殊堂の姿がみえる。本図の額縁には鹿4頭と桐の葉のような植物も配され、多くの樹木が描き込まれた絵図である。右下にはまた、鹿教湯の分析書と効用書も記されている。

明治37年(1904)の朝日新聞に掲載された「初ゆあみ」にも、鹿教湯温泉についての

記述がある。「初ゆあみ」は、大和田建樹が長野県の丸子地方の温泉を尋ねた紀行文であり、1月23日から7回に亘って連載され、当時の温泉場の様子を伝えてくれる。例えば2月4日の第5回には、「鹿教の湯⁽²⁷⁾」と記された次のような記述がある。

こゝの湯は二箇所に分れて極めてぬるぎと極めて熱きと有るのみ中なるは缺けたり 先づぬるぎに入るに燈火薄暗く湯気うち煙りて中は何も見えず余りに寒ければ着たる物も脱ぎあへぬ位に探り^{ママ}石段を下りて飛び込めば 真中に寢より落ちくる瀧あり こゝは暖かなりとて皆々これを取り巻き足さし伸ばして向きあふ有様あたかも蓮華の開けたるにぞ似たりける 始こそ寒きからだを入れたれば暖かなりしが 暖まると共にぬるさを感じて堪へられねば いでや熱い方にと一人がいへば我も^{ママ}と賛成して上りたるが熱い湯は河原湯とて今少し下の方にあり 之へ行くには湯



図4 「長野縣信濃國小縣郡鹿教温泉場全圖」部分

渡りと称へて裸のまゝ走りゆく習ひなりといへば そは面白からんと一同に飛出したるに雪は降りくる道はすべる され共酒の勢まだ弱らねば 愉快々々といひつゝ、右へ曲り左へ折れ坂を下りゆく時の姿は昼ならばポンチにや書かれん鳥羽絵にや写されんひそか名づけて私に裸体行列といへり

ぬるい湯と熱い湯とに分かれていたというのは、鹿教湯と河原湯を意味しているのだろう。まずぬるい方に入ると中央に笥から湯が瀧のように落ちていたので、「暖かなり」といって皆がこれを取り巻いて足をそちらに伸ばしたようだ。その様は蓮華が花開いた姿に喩えられている。しかし、体が温まってくると湯のぬるさに耐えられなくなり、一人が熱い湯にと声をかけると、他の人々も我も我もと下手にある河原湯に、雪の降る坂道を裸のまま湯渡りしたとある。筆者はこれを裸体行列と名付けている。

河原湯は東京の銭湯程の熱さがあるため、この後一行は河原湯で十分に体を温め、再び上へ登って着物を身に着け、宿へ帰ったと後述されている。

しかし、その後間もなくこの湯渡りの光景は見られなくなったようだ。

浴槽はもと河岸に降りて鹿教湯、河原湯の二漕相並びでありしが、明治三十九年に至り大に改修を行ひ、工費七千四百五十五圓餘を投じ、鹿教湯の位置をさげ、河原湯は水力唧筒を以て同一浴室内に導き、両者相並びて浴者に便す。

(小県郡役所編『小縣郡史餘篇⁽²⁸⁾』1923)

多額の費用をかけた大改修の末、高低差のあった二つの外湯は一つの浴場にまとめられた。同じ浴場で二つの湯を楽しめるようになったわけである。「初あゆみ」が書かれてから2年後の、明治39年のことである。

「新湯」はこれとは別に紹介されている。

鹿教湯を距ること東方三町にして、泉源は川を隔てゝ対岸にあり、明治四十四年樋を以て之を引き、浴室に導きしも、其後洪水のため被害を受く。

(小県郡役所編『小縣郡史餘篇⁽²⁹⁾』1923)

新湯にも、明治44年に浴室が作られていたのが、わずか10年で洪水の被害を受けてしまったようだ。河原湯も改修工事をしていなかったなら、同様の被害を受けていたことだろう。

鹿教湯の宿は、旅館名にもあった斎藤一族が文殊堂を守りながら始めたといわれ、旅館同士の結束は固かったようである。大正初期までは、まつやと林屋を除く7件の旅館が営業しており⁽³⁰⁾、昭和30年にボーリングによって温泉が採掘されるまで、鹿教湯温泉はぬるめの湯であり、効能の異なる河原湯と共に多くの湯治客を集めていた様子がわかる。

3. 温泉名と由来の変遷

地誌類によって鹿教湯温泉が確認できるのは、安永2年(1773)に刊行された『信濃地名考⁽³¹⁾』が初めになる。本書では、小県郡の温泉として「掛湯一座」と「靈泉寺湯一座」、また「田澤湯」や「別所湯」、「印内湯」、「小倉湯」の六湯が挙げられている。この中で鹿教湯温泉に当たるのは「掛湯一座」であろう。なお本書では、よみ人しらずの古歌にある信濃の「那須の御湯」についての記載もあり、これが高梨村にある「梨の御湯」すなわち掛湯か靈泉寺湯なのではないかと記されているが、詳細は不明だ。

次にみえるのは、明治12年(1879)の『信濃国地誌略』である。この上巻にある温泉に関する記載箇所の一部を次に示す。

温泉、石湯、久我、大師、大湯、玄齋ノ諸湯ハ別所村ニアリ、査掛ノ湯ハ査掛村ニ

アリ、旗銚 一名子持ノ湯ハ田澤村ノ中村ニアリ、鹿教 川原ノ二湯ハ西内村ノ高梨ニアリ 靈泉寺ノ湯ハ同村ノ平井ニアリ、嶽ノ湯ハ小澤根村ニアリ、(以下略)

(『信濃国地誌略⁽³²⁾』上 1879)

それぞれの湯がどの村にあるのかが示されたものだが、本書では鹿教湯温泉が「鹿教ノ湯」と「川原ノ湯」となっている。またこれとは別の、郡ごとの記載箇所でも、「鹿教」と「川原」の二つが高梨所在とされ、そこには「カケ」と「カハラ」の読み仮名が振られている。

続く明治20年(1887)刊行の『小学信濃地誌』においても、鉱泉の項に「別所、杓掛、鹿教、靈泉寺、ノ諸泉ハ小縣郡ニ⁽³³⁾」とあり、やはり「カケ」と読みが付されている。

このように、当初は「掛」とあったのが、明治になると「鹿教」の字が当てられるようになっていくのがわかる。共に「かけ」と読めるが、その意味するものは大きく異なっているようだ。

5年後の明治25年(1892)刊行の『信濃温泉誌』では、「鹿教温泉」の名で紹介されており、「湯」から「温泉」への変化がみられる。また、「鹿教湯」と「河原湯」それぞれの泉質と効能が記され⁽³⁴⁾、温泉の沿革として次のような記述がある。

むかし
往昔一獵夫あり山中に入りて鹿を射る 鹿逸して深奥に逃れ其影を失す 数日を経て獵夫また山に入らんとし 路に瀕水中に一鹿の浴するを認め矢を擬す 鹿忽ち逃れ隠る これ前日山中に射たる足の瘡痕^{きず}全く癒えて飛走自在、獵夫怪み行きて検するに温泉にてありしかば其療病に効驗あるを悟りて 近傍の諸人に告ぐ 後ちに村人こゝに浴槽を構へて以て今日に至れり 鹿教の名蓋し爰に由因すといふ古歌あり曰く

ありがたや文殊の誓ひあらわれてかけの

湧湯は千代もつきせし

(西澤俊司編『信濃温泉誌⁽³⁵⁾』1892)

獵夫が、数日前に射損じた鹿が水たまりに浴しているところを発見する。しかし、回復した様子で逃げ去ったことから、獵夫はその水が効驗ある温泉と悟り、村人も知るところとなった。この出来事によって「鹿教」の名になったと説かれ、末尾には文殊菩薩とのつながりを暗示する古歌も記されている。

これをみると、明治になってから登場する「鹿教」の名は、この古伝承にちなんだものと理解されるだろう。傷ついた動物の行動によって湯の所在と効能を知るという伝承は、日本の各地にある。では、『信濃地名考』にあった「掛湯」は何だろうか。単なる当て字の違いだろうか。

鹿教湯の温泉場は、先にみた通り坂の下にあった。河原湯はさらに下手の河原から湧出した湯を利用したものだった。実は、これらは崖の下にあったことから地元では古くから「がけの湯」と呼ばれていたという⁽³⁶⁾。これが「がけ湯」や「かけ湯」となり、さらに「鹿教湯」へと変化したようだ。「かけ湯」は『信濃地名考』の「掛湯」につながるものである。

この名称変更は、約400年前の宿の主人たちの考えによるものだという。その理由は、松本の「がけの湯」のように同じ名称や似たような名前の温泉地が他にもあるためである。また、名前に面白みがないということもあって、付近でよく見られた鹿の登場する伝説を導入し、湯と共にその効能を世間に広めようと考えたというのである。その考案者は、「湯端五軒」のような古くからある宿の主人たちだったようであり、まさに文珠の知恵といえるだろう。この「湯端五軒」とは、斎藤旅館、つるや、かめや、和泉屋、角屋であり⁽³⁷⁾、湯端通りは諏訪社から浴場へ向かってまっすぐに伸びた道であった。なお、宿から浴場への坂道が中気坂と呼ばれているのは、中風に効

能のある湯にちなんだものである。

このように、江戸時代に温泉名の変化をみた鹿教湯であるが、他の文献ではどのように取り上げられているだろうか。先の『信濃温泉誌』と同年に刊行されている二冊の『信濃鉱泉誌』を順にみてみよう。

11月刊行の下條臺次郎編『信濃鉱泉誌』には「鹿教湯」とあり、並んで「河原之湯」と「新湯」もある。目次には、各湯の後に「鉱泉」も明記されている⁽³⁸⁾。

翌月刊行の齋藤利一編『信濃鉱泉誌』は、「鹿教湯温泉」として泉源を「鹿教湯」、「河原湯」および「新湯」の三箇所とする。現在の名称である「鹿教湯温泉」の初見になる。また、これらを西内鉱泉、又の名を「高梨ノ湯」とも記している⁽³⁹⁾。

大正2年(1914)に刊行された『日本伝説集』は、東京朝日新聞社が広く募集した民間伝説数百件の中から、高木敏雄が選別し分類解説したものである。「鹿教湯」は、縁起伝説の中の湧泉伝説として本書に掲載されている。次にみよう。

鹿教湯

信州上田の西南、五里ばかりの山奥に、鹿教湯という温泉がある。昔、或狩人が、良き獲物もがなと、山深く分けてゆくと、とある芝生に、鹿が一匹寝転んでゐる。狩人を見て、拝むやうな風をして見せるので、狩人も不思議に思つて、近寄つて見ると、鹿は脚に深疵を負つてゐた。そして其鹿の近くに、濛々と湯気を立て、温泉が湧出てゐた。鹿は此温泉に疵口を浸して、芝生に休んでゐたのであつた。

鹿が教へて見つかった温泉であるから、鹿教湯と云ふのださうで、今では此界限での名高い温泉に成つてゐる。(信州上田在御所竹内正吉君)

(高木敏雄『日本伝説集⁽⁴⁰⁾』1990)

上田に住む人物が寄せた伝説であるのがわかる。『信濃温泉誌』の説話にあつた、猟夫が鹿を射るモチーフが抜け、初めから手負いの鹿となっている。また、猟夫を恐れて鹿が逃げる部分も省かれ、かわりに命乞いをする



図5 五台橋からみた中風坂。右手の白い建物は共同浴場の「文殊の湯」になる。文殊堂の春祭りにあたり、堂に向かう天龍寺和尚たちの姿がみえる。

様子がみえる。芝生上という点も異なっている。

次にみるのは、大正6年（1917）に出された『日本伝説叢書 信濃の巻』である。本書は、藤澤衛彦が信濃の国に伝わる伝説を252話集め、内容によって分類した伝説を地域毎に編集したものであり、湧泉伝説として「鹿教湯」が載っている。次に示す。

鹿教湯（小県郡高梨村）

上田の西南、五里山入りにある鹿教湯は、鹿に教へられて見出された温泉だと言はれてゐる。

昔、一人の^{きつを}猟夫が、山深く分け入つて、獲物を猟つて歩いてゐると、湯気を立てゝゐる水で、手負ひの鹿が、頻りに、疵口を浸してゐるのを見た。不思議に思ひながら、だんだん近寄つて見ると、それは湧出てゐる温泉であつた。で、此温泉地が、鹿教湯と呼ばれるのは、かうした因縁からである。（口碑）

（藤澤衛彦編『日本伝説叢書 信濃の巻⁽⁴¹⁾』1917）

『日本伝説集』同様に短くまとめた内容に

なっている。口碑によるものとの記述もある。

大正12年（1923）に刊行された『小県郡史餘篇』は、郡内にある温泉についても詳細に記しており、鹿教湯は「鹿教湯温泉」の名で次のように紹介されている。なお、「新湯」は別の扱いになっている。

鹿教湯は一に文珠湯、又は那須湯ともいふ。伝説に往昔猟師あり。来りて一頭の鹿を射たり。鹿矢に中たれども逸走し去り、其往く所を知らず。翌日猟師再び山に入り徘徊せしに、彼の鹿が一瀦水に浴するを見、又矢をつがひて将に放たんとするや、鹿は其創傷全く癒えたるにや、忽ち逃れ去りぬ。猟師怪みて其瀦水に至り、検するに温泉なり。其効かくの如きを異とし、治く之を世に知らしむ。浴者果して験あり、鹿の教ふる所なるを以て名づけて鹿教湯といふ。而して其鹿、実は文珠菩薩の化身にして、此霊湯の所在を知らしめられんがための所為なりきとか。ありがたや文珠の誓あらはれて鹿教の湧く湯は千代もつきせし 源宣慶（以下略）

（小県郡役所編『小縣郡史餘篇⁽⁴²⁾』1923）



図6 文殊堂

先の『信濃温泉誌』とよく似た内容である。同書の説話を参考にして文章を加えたものと考えられる。特に、前話にはなかった一文、すなわち「而して其鹿、実は文殊菩薩の化身にして、此靈湯の所在を知らしめられんがための所為なりきとか。」がある。この一文によって、鹿は野山を駆ける普通の鹿から、文殊菩薩の化身へと変化を遂げている。湯の所在を教えてくれたのは、実は文殊菩薩であったと示されているのである。源宣慶の歌の意も、これによってより鮮明になっている。

昭和8年(1933)に小山眞夫が出した『小県郡民譚集』にも、鹿教湯温泉にまつわる伝説が載っている。次にみよう。

鹿教湯

昔獵師があつて内村の奥で一頭の鹿を射た、鹿は矢に中つたけれど逃げていつて何處へ隠れたかわからなくなつた。翌日獵師は再び山にはいり鹿の行くへをさがしてゐた。

件の鹿は水たまりにはいり、傷をひたしてゐる。獵師は之をみるより又矢をつがひて射やうとしたのに、鹿は其創が全く癒えたのか忽ち跳ね上り逃れ去つてしまつた。

獵師は怪しんで其水たまりに行つて検べてみたら温泉であつた、其効能が大したものだと人々に話し伝へた、浴する者が誰もききめがあると喜んで、鹿の教へてくれた湯だから 鹿教湯と称へるやうになつた。

そして其鹿といふのは実は文殊菩薩の化身であつて、此靈湯のありかを広く知らせやうとしての為わざであつたと。この事が聞えろと行基菩薩の弟子圓行が巡錫して此靈地に文殊堂を創建した、これが今の鹿教湯の開けはじめである。(高梨新蔵)

(小山眞夫『小縣郡民譚集⁽⁴³⁾』1933)

『小縣郡史餘篇』とほぼ同じ内容である。しかしながら、本話は文殊菩薩の化身だけでは終わっていない。湯の由来を耳にした行基の

弟子という圓行が、巡錫の末にこの地に文殊堂を創建したとあり、話はさらに発展している。本書には話の提供者も載っていることから、地元に伝わっていた伝説と理解できる。

また、注に「日本伝説所収のものと異なつてゐる点に注意せられたい。」としているのは、異なる内容である本話の存在を強調しているようだ。そして、「鹿教湯は一に文殊湯、又は那須湯ともいはれる。」と記され、当時の温泉には別名もあつたことが窺える。文殊湯は、文殊菩薩とのつながりを示す名称である。

さらに時代が下り、昭和45年(1970)に浅川欽一が編集した『信州の伝説』には、わずかではあるが次のように記されている。水の伝説の「鹿の湯」の項である。

小県郡丸子町西内の鹿教湯は、その名の通り鹿に教えられたところと伝えられる。昔、狩人が芝に鹿が寝ているのを見て、行つてみたらそばに温泉がわき出ており、鹿はその湯で足の傷をいやしていたのだつた。これがここの温泉の起こりだという。

(浅川欽一編『信州の伝説⁽⁴⁴⁾』1970)

『日本伝説集』の話の短くまとめたのだろう。芝という点が共通している。文殊菩薩や圓行のくだりはない。



図7 マンホールに施された鹿の親子と湯玉

最後に、近年刊行された和田登編著『信州の民話伝説集成 [東信編]』から引こう。

鹿教湯の由来

むかし、いまの鹿教湯のあたりは、森林が生い茂り、谷が深くて普通の村人たちは、なかなか入れる場所ではなかった。

ところがある日。狩人がこの近くに来たところ、鹿が谷をのぼっていくのを目撃した。狩人は、ただちに弓矢に手をかけ、一矢を放った。

「しめたっ！」

と思ったのも束の間。鹿は腰のあたりに刺さった矢をものともせず走り、たちまち森の奥へ姿をくらましてしまった。狩人はさんざん探したが、ついに見つからなかった。

そこで翌日、無念さをはらすために、またそのあたりまで出かけていくと、血のしたたり落ちたあとが、点々としていた。それをたどっていったところ、「おや？」と驚いた。そこには温泉が吹き出しており、鹿はその湯で傷を洗っているではないか。

狩人が、急いで弓をかまえると、相手はとたんに逃げ出し、元気いっぱい走り、森の中に消えてしまった。

—これは、不思議な湯だ。

そのことを、帰って村人たちに話すと、その湯を訪れる者が絶えなくなった。何でも、病氣やケガによく効くというのである。いつのまにか人々は、鹿が教えてくれた湯ということから、鹿教湯温泉と名付けて親しむようになったということである。

円行という偉いお坊さんがやってきてこの温泉につかり、七日間もすると病氣が治ったので、大変賞賛した。そこで、ここを霊地にしようと、小さなかやぶきの小屋を建て、文殊菩薩を安置し、拝み奉った。これはのちに大智山天龍寺と名付けられた。

(和田登編著『信州の民話伝説集成 [東信編⁽⁴⁵⁾]』2006)

これまでみてきた説話の中で、最も詳しい内容といえる。本書では、より具体的にわかりやすく再話されているようだ。円行の様子や大智山天龍寺の名も記されている。再話の問題についてはここでは触れないが、本話が鹿教湯の由来を伝えるものとして広く人々に示されていることを確認しておきたい。

4. むすび

鹿教湯温泉は、内村川沿いに湧く中風に良い湯として長く人々に親しまれてきた。ぬるい湯の鹿教湯を補うように、川底の岩間から湧出する河原湯は、鹿教湯とは泉質の異なる熱い湯だった。昭和になっても浴客の滞在日数は9日間が平均であり⁽⁴⁶⁾、療養のために長逗留する人の多い温泉だったことがわかる。薪代を取る木賃宿から自炊のできる湯治宿や旅館へ、宿も木造から鉄筋へと時代の流れによって姿を変えていった。外湯から内湯へと変わったのも、時代の趨勢によるものだろう。源泉の管理も、幕府から明治政府へ、そして西内村から湯端組合へと移り、現在は丸子温泉開発株式会社が管理する、三社の共同所有となっている⁽⁴⁷⁾。そのような時代の移り変わりの中で、鹿教湯温泉は先にみた湯端五軒を中心に経営されてきた。斎藤一族が文殊堂を守りながら始めたといわれるように、旅館経営者には斎藤姓が多い⁽⁴⁸⁾。そのような一族を中心とした温泉地だったこともあり、団結力が強かったのだろう。他の温泉地との差別化を図るために、温泉名を「がけの湯」から「鹿教湯」へと変え、集客に努めたのである。近辺にいる身近な動物をイメージシンボルとして取り込み、人々に親しみの持たれる湯として宣伝したといえる。鹿はまた、古くから歌に詠まれることの多い動物であるため、文殊堂や五台橋と共に、風情ある温泉地へとイメージの刷新を図るのに適した動物であった⁽⁴⁹⁾。

一方、温泉の由来を説く伝説は、後に人の口によって伝えられてきたためか一様ではなかった。手負いの鹿と猟師を中心に据えながらも、時代が下るにつれ付随するものが増え、湯の効能と文殊菩薩のご利益を人々の心により強く訴えかける内容に変化していた。

このように、鹿教湯温泉は温泉の本質的な価値に加え、伝説等の文化的な要素を導入することで、温泉地のイメージを一新させていたことがわかった。温泉地が自らの力でその魅力を高めるのに成功した、古き好例といえる。

註

- (1) 高木敏雄『日本伝説集』(1990宝文館出版) 184・185頁。なお、本書の初版は郷土研究社から自費出版により1913(大正2年)に刊行されている。
- (2) 柳田國男『山島民譚集』(甲寅叢書刊行所1914)。なお、引用は『柳田國男全集』2(筑摩書房1997)397頁による。
- (3) 柳田國男『日本神話伝説集』(アルス1929)。
- (4) 柳田國男『日本伝説名彙』(日本放送出版協会1950)。
- (5) 加藤玄智・宮坂光次「温泉の信仰と伝説」(山中忠雄編纂『温泉大鑑』日本温泉協会1935)656～681頁。
- (6) 山口貞夫「温泉発見の伝説」(『旅と伝説』10-11 1937)13～19頁。
- (7) 荒木博之他編『日本伝説大系』別巻2(みづうみ書房1990)118頁。
- (8) 例えば、齋藤純「温泉発見伝説」(『日本「神話・伝説」総覧』新人物往来社1993)や、横井教章「禅寺の伝説と温泉の文化」(『曹洞宗研究員研究紀要』30 曹洞宗宗務庁2000)等がある。
- (9) 藤浪剛一「温泉の発見と伝説」(『温泉知識』丸善1938)106～113頁。
- (10) 河野忠「温泉発見・開湯伝説から見た泉質と効能に関する予察的研究」(「大分県温泉調査研究会報告」58大分県温泉調査研究会2007)31～40頁。
- (11) 甘露寺泰雄「動物の発見伝説に係る温泉の泉質—既存文献と河野調査データの解析を通しての考察—」(『温泉地域研究』18日本温泉地域学会2012)13～24頁。
- (12) 大山琢央「熊本県菊池温泉の開湯に関するエピソードの利用と展開」(『温泉地域研究』14日本温泉地域学会2010)9～18頁。
- (13) 丸子町誌編纂委員会編『丸子町誌 歴史編』下(丸子町1992)487～495頁。
- (14) 丸子町誌編纂委員会編『丸子町誌 歴史編』上(丸子町1992)592～599頁。
- (15) 丸子町誌編纂委員会編『丸子町誌 自然編』(丸子町1992)78頁。
- (16) 註(13)の文献に同じ、477・481頁、および2012年8月12日の実地調査。
- (17) 永井宏昌編著・刊『内村の山々と住民』2006173～175頁。
- (18) 西澤俊司編・刊『信濃温泉誌』1892(明治25年)5頁。
- (19) 前掲書に同じ、9頁。
- (20) 下條臺次郎編『信濃鉱泉誌』(一合社1892)20頁。
- (21) 前掲書に同じ。
- (22) 註(20)の文献に同じ、22頁。
- (23) 註(20)の文献に同じ、24頁。
- (24) 斎藤利一編『信濃鉱泉誌』(中村活版所1892)15頁。
- (25) 註(13)の文献に同じ、480頁。
- (26) 斎藤守『厚生省指定保養地鹿教湯温泉案内 信州 鹿教湯の里』(カシヨ印刷株式会社出版部1976)54・55頁。
- (27) 大和田建樹「初ゆあみ」5 朝日新聞 1904(明治37年)2月4日掲載。
- (28) 小県郡役所編『小縣郡史餘篇』小県時報局1923(大正12年)51頁。
- (29) 前掲書に同じ、54頁。
- (30) 註(13)の文献に同じ、480頁。
- (31) 吉沢好兼『信濃地名考』下 1773(安永2年)。別名『科野名与勢』ともいう。なお、本資料の出典は、信州デジくら(長野県デジタルアーカイブ)による。
- (32) 『信濃国地誌略』上 長野縣蔵版(県長野図書館蔵)1879
- (33) 稲垣乙丙編『小学信濃地誌』1887(明治20年)二書房蔵版(県長野図書館蔵)
- (34) 註(18)の文献に同じ、4頁。
- (35) 註(18)の文献に同じ、4・5頁。
- (36) 註(17)の文献に同じ、277頁および2012年4月4日、同年8月12日の実地調査。一説には、鹿教湯は「かきょう湯」から「かけ湯」になったともいわれている。
- (37) 2012年4月4日、同年8月12日の実地調査。
- (38) 註(20)の文献に同じ、目次および20～25頁。
- (39) 註(24)の文献に同じ、15～17頁。
- (40) 註(1)の文献に同じ、184・185頁。
- (41) 藤澤衛彦編『日本伝説叢書 信濃の巻』(日本伝説叢書刊行會1917)326頁。
- (42) 註(28)の文献に同じ、51頁。
- (43) 小山眞夫『小縣郡民譚集』(郷土研究社1933)6頁。
- (44) 浅川欽一編『信州の伝説』(第一法規出版

1970) 133頁。

(45) 和田登編著『信州の民話伝説集成 [東信編]』
(一草舎出版 2006) 89・90頁。

(46) 註(13)の文献に同じ、481頁。

(47) 2012年8月12日の実地調査。

(48) 斎藤家には、武田家の武将である高梨氏がこの地に逃れてきて、敵に知られないように姓を斎藤に改めたという伝承がある。確かに付近一帯は旧高梨村であり、高梨集落には斎藤姓が多い。同じ丸子温泉郷にある大塩温泉も、武田信玄の家臣の大塩氏が発見した湯といわれ、傷兵の治療に利用されていたと伝わる(註(13)の文献等)。霊泉寺にも、長享2年(1488)に武田信玄が寄進したという雲版銘がある。

また、文殊堂は元禄14(1701)に着工し、宝永6(1709)に再建された記録が残されている。大工の棟梁は諏訪郡下之原村の牛山平左衛門であり、元禄時代の仏堂の作風をよく伝えるものとして、昭和63年に県宝に指定されている(註(13)の文献)。本尊の文殊菩薩像には行基が彫ったという伝承もあるが、古い文殊堂と共にその詳細は定かではない。

(49) 斎藤旅館の当主は、代々弥惣太を名乗ることが多いようだが、近世期の当主には、上田藩士の田毎月丸や狂歌師の鹿都部真顔に学び、同士を集めて那須連を組織した人物がいる。歌号は山辺鹿住であり、18世紀から19世紀にかけて実在した人である(長野県編『長野県史 通史編』6 長野県史刊行会 1989)。歌号に「鹿」があることから、鹿教湯の命名は、この人物を中心になされた可能性も考えられる。なお、中風坂の途中には「鹿教湯紀行詩歌揭示板」が掲げられ、旅人の詠んだ詩歌を記した木製の短冊が多くみえる。現在も歌とのつながりの強い土地である。

<付記>本稿は、公益財団法人トヨタ財団2010・2011年度「研究助成」による研究成果の一部である。同財団には記して感謝の意を表したい。また、本稿作成に当たっては、鹿教湯温泉の皆様、霊泉寺温泉の清水研一氏に大変お世話になった。心より御礼申し上げたい。